

中瀬 勳

なかせ

いさお



兵庫県立人と自然の博物館 館長、
兵庫県立淡路景観園芸学校 学長、兵庫県立大学 名誉教授

昭和45年 大阪府立大学農学部 卒業
同 47年 大阪府立大学大学院農学研究科修士課程 修了
同 47年 大阪府立大学農学部 助手
同 52年 大阪府立大学農学部 講師
同 55年 農学博士（九州大学）
同 61年 大阪府立大学農学部 助教授
平成 2年 兵庫県立自然系博物館（仮称）設立準備室 主任指導主事
同 4年 兵庫県立人と自然の博物館 環境計画部長
同 4年 兵庫県立姫路工業大学自然・環境科学研究所 教授
同 13年 兵庫県立人と自然の博物館 副館長
同 16年 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授
同 21年 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科長
同 21年 兵庫県立淡路景観園芸学校 校長
同 25年 兵庫県立人と自然の博物館 館長
同 25年 兵庫県立大学 名誉教授
同 29年 兵庫県立淡路景観園芸学校 学長

昭和55年 日本造園学会 学会賞（研究論文部門）
平成18年 兵庫県 科学賞、兵庫県 功労者表彰
同 24年 日本公園緑地協会 北村賞
同 24年 日本博物館協会 顕彰
同 29年 地方自治法施行70周年記念 総務大臣表彰
同 30年 日本造園学会 上原敬二賞、三田市制60周年表彰 特別賞
令和 元年 神戸市制130周年 功労者表彰

受賞者紹介

「災害復興や多自然居住地域創生のためのみどりを通じたコミュニティ形成に関わる理論の構築とその実践」に関する功績

近年の激甚な自然災害に際し、建造物の強靱化などのハードな対策だけでは十分な対処がかなわないことが広く社会的にも認識されるようになった。今後は、人と自然が共生する持続的な社会づくりを目指した、多様な主体の参画にもとづくコミュニティ形成が求められる。

中瀬氏は、阪神・淡路大震災からの復興過程における、みどりを通じたコミュニティ形成の実践的研究の先導的役割を果たしてきた。みどりの保全整備やまちづくりへの多様な主体の参画は、主に1960～70年代のアメリカにおいて、その嚆矢となる理論構築や手法開発がなされた。しかしこうした理論と手法は、適用される社会の状況や事象に従いその再定義や応用が必要となる。中瀬氏は、多民族国家としてのアメリカにおいて、民族間の対立や差別の解消を基調に開発された理論と手法を、そうした問題が少ない一方、官民等各セクター間の隔たりが存在する我が国の社会に適した理論と手法に再構築し、さらに震災という激甚災害からの復興に対応すべく、現場でのワークショップ等の開催を通じて得られた知見を、随時、理論や手法のあり方にフィードバックし、その熟成を図った。こうしたプロセスを通じ、みどりを通じたコミュニティ形成を基礎とした官民協働による復興の先導的役割を果たした。さらに、地域の復旧・復興に関する造園・都市計画にかかわる学術調査および支援活動の中心的役割を担い、造園分野の復旧・復興の基礎となった『公園緑地等に関する阪神大震災緊急調査報告書』をとりまとめるとともに、被災者を花と緑で支援する造園専門家のネットワークを設立するなど具体的取組の一翼を担った。このように中瀬氏は、みどりを通じたコミュニティ形成にもとづくまちづくりを通じ、阪神・淡路大震災発生後の官民協働型復興を支える先駆的・中心的な役割を果たした。

一方、わが国の国土政策の柱のひとつである多自然居住地域の創生は、里山里海など、人と自然の共生による自立的圏域の形成を目指すものであり、そこでも地域に居住する様々な利害関係者（ステークホルダー）の地域形成への参画が推進上の鍵のひとつとされる。しかし、そうした主体の参画を図るためには、人と自然の共生にかかわる様々な学術的知見を的確に地域に還元することで、ステークホルダーの的確な理解を促す必要がある。

中瀬氏は、兵庫県における多自然居住の推進にかかわる学術的・実践的拠点である兵庫県立人と自然の博物館において博物館活動の牽引役を担うとともに、全国における多自然居住による地方創生の先駆けとなった「丹波の森構想」の策定や、「県立コウノトリの郷公園」、「北はりま田園空間博物館」などの諸組織・施設についても、その構想段階から具体的組織・施設の整備、運営に至るまで、中心的な役割を演じてきた。このように中瀬氏は、多自然居住にかかわる学術研究の推進のみならずその知見を幅広く国民へ普及啓発する事業、およびそのための組織づくりと運営を牽引する役割を担ってきた。

中瀬氏はさらに、わが国における造園緑地学分野の学術的発展にも高く寄与するとともに、こうした業績に対して、日本造園学会上原敬二賞、日本公園緑地協会北村賞、日本博物館協会顕彰などを受賞している。

以上のとおり中瀬氏は、自然災害からの復興における地域再生や多自然型居住地域の創生を推進する上で不可欠な、みどりを通じたコミュニティ形成にかかわる理論の構築とその実践を通じ、みどりに関わる学術研究の推進とその成果の国民への普及啓発を牽引してきており、その業績は高く評価されるものである。